

高岡銅器

美しい金属は、あたたかい。



厳正な審査を経て

富山県内外の有識者で構成する「富山県推奨とやまブランド」育成・認定委員会が、「高い品質と信頼性・安全性」、「オリジナリティ」、「富山らしさ」、「市場性」、「将来性」の5つの基準で品目を評価し、厳正な審査を経て、「富山県推奨とやまブランド」の認定品を決定しています。

富山県の極上の産品

「富山県推奨とやまブランド」は、魅力ある富山県産品の中でも、とくに自信を持って誇れる極上の産品です。豊かな自然と歴史、そこで培われた人々の知恵や文化を「とやまブランド」の魅力と結びつけ、「富山県」の地域イメージとして国内外に発信しています。

富山県推奨とやまブランド
「高岡銅器」認定事業者

伝統工芸高岡銅器振興協同組合

高岡市開発本町1-1

TEL.0766-24-8565

<http://www.kougei.or.jp/takaoka/>

高岡銅器協同組合

高岡市開発本町1-1

TEL.0766-23-8210

<http://www.doukikumiai.com/>



人と風土に、ストーリーがある
とやまブランド物語 | VOL.11

富山県観光・地域振興局地域振興課
TEL.076-444-9605 http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1400/kj00010203.html



歴史に鑄込まれた 誇りと技が、銅を吹く。



「土や木にも似た 銅のぬくもり」

貴金属のような眩い輝きがあるわけではなく、銅のよりに靱さを誇るわけでもない。それでいて、人を魅了してやまない銅鑄物。金属でありながら、土や木にも似たぬく

もりある質感は、見る者、触れる者の心を静かな感動で満たす。

富山県高岡市の伝統工芸、高岡銅器。400年にわたって受け継がれた技が、茶器、花器、香炉、仏具から銅像、梵鐘まで、多彩なかたちをつくりだす。高岡は日本最大

の青銅器産地である。

市内を流れる千保川のはとど、石畳の道に面して、「さまのこ」と呼ばれる千本格子の家並みが続く。

どの家も間口が狭く、奥行きが深い町家の造り。銅器商、地金商、鑄造所、着色や仕上げの工房など、銅器に関わる様々な生業が、昔ながらのたたずまいを残すこの町で、今もいとなまれている。高岡鑄物の発祥の地、金屋町。高岡銅器の技はここで生まれ、磨かれてきた。

「七人の鑄物師から 始まる物語」

慶長14年(1609)、加賀藩二代藩主の前田利長は、射水郡関野の地に城を築き、家臣と町民を城下に住まわせて高岡の町を開いた。

城下の西、現在の千保川には当時、庄川の本流が流れていた。城主となった利長は、町の発展を願い、川をへだたせた城下の対岸に「工業地帯」の建設を計画する。

上流の砺波平野や下流の

伏木湊と水運で結ばれ、鑄鉄の原料となる砂鉄、燃料の薪炭、保温材のわら灰、鑄型をつくる川砂などを得やすい立地。ここに、河内鑄物師の系譜をくむ西部金屋村の鑄物師七人を移住させ、鑄物の生産を命じたのだ。

5000坪の拝領地には「たたら場」が築かれた。藩の諸役が免除される特権を与え

られた鑄物師たちは、町民の生活に欠かせない鍋や釜、後背地の農業に用いられる鋤や鍬など、実用的な鉄鑄物の生産に精を出した。

その後、慶長20年(1615)の二国一城令により、高岡城は廃城の運命をたどる。武家の多くは町を離れ、高岡は商人の町、職人の町へと大きく変貌することになる。やがて、庄川本流は城下の東に移り、千保川沿いの金屋町は、鑄物職人の町として発展を遂げていく。



千本格子の家並みと銅片の敷き込まれた石畳の道が続く金屋町

武家が築き 町衆が発展させた 工芸のまち高岡。

高岡銅器の技術を結集して昭和初期に建立された高岡大仏



本焼技法で着色された焼朱銅色花瓶



銅器の表面に細密な図柄を浮かびあがらせる彫金の技法

作家としての顔も持つ。
「デッサン、鋳型づくり、地金の配合、吹き作業……50年続ける仕事ですが、今でも試行錯誤の連続です」
般若さんが取り組む双型鋳造は、焼型、鑄型と並ぶ伝統的な鋳造法。花瓶や茶器

などの円筒形や円錐形の造型に適した、シンプルだが奥の深い技法だ。
「鋳型を外し、鋳物を取り出す。数え切れないほど銅器を吹いてきましたが、かたちが現れる瞬間は、何度吹いても感動的です」



鋳型に1200度の湯が注がれると眩い光と煙があがる

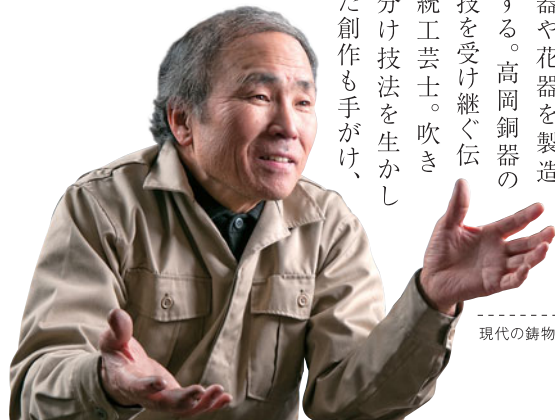
灼熱の火に溶かされて 銅の美しさが目をさます。

「鋳型の中で 蛹化するかたち」

るつぼの中の地金が熔ける。やがて地金は1200度もの高温の「湯」となり、オレンジ色の光を放つ。高岡銅器の鋳込み作業。2月の厳しい寒さの中でも、「かね吹き」の現場は文字通りの熱気に包まれる。「いい温度になったら吹きは待ったなしです」
るつぼの湯を取鍋に移した瞬間に、般若保さんの表情が変わる。湯の高温が保たれているのは、わずかな時間。慎重に、しかし無駄のない

い動きで、作業場に並べた鋳型の湯口に、熔けた銅を注いでいく。

銅器づくりに携わって50年。兄弟といとなむ鋳造所で、茶器や花器を製造する。高岡銅器の技を受け継ぐ伝統工芸士。吹き分け技法を生かした創作も手がけ、



現代の鋳物師 般若保さん(伝統工芸士)

「美を磨いた 町衆のエネルギー」

双型、鑄型、焼型などの技法を用いて、高岡で銅器が鋳造されるようになったのは、加賀・越中の商工業の中心として町が発展をとげた江戸中期。

町衆たちの自由で華やかな文化が開花し、その影響を受けて、鋳物づくりは実用的な鉄鋳物から、装飾性の高い唐金鋳物(青銅鋳物)へと広がった。着色や彫金を施した仏具、香炉、花器などがつくられるようになり、全国に販路が拡大したのもこの頃である。

近代を迎えると、刀の装飾に使われていた細密な彫金や象嵌の技法が、高岡銅器に採り入れられる。精緻なデザインを吸収した高岡

銅器は、美術品としての価値を高め、ウィーン、ロンドン、パリなどで開催された博覧会でも高い評価を得ることになる。

近代的な技術が導入され、工程の分業化が進んだのは明治中期。この頃、後継者養成とデザインの強化をめざして富山県工芸学校が創設され、銅器の発展を担う多くの人材を育てた。その歴史は、現在の富山県立高岡工芸高校、富山大学芸術文化学部にもつながっている。

般若さんの作品「鬼面風炉」



「その道のプロが
技を競いあう」

「铸件ができて、まだ半分。その先の仕事で、銅器はどんどん化けていきます」

铸件から取り出した銅器の肌を削るろくろ引きの作

業をしながら、般若さんは話す。

铸件の砂と反応して黒ずんだ粗い铸肌が落ち、銅独特の鈍い輝きが姿を現す。

その表面をさらに削り取って、イメージどおりの美しい曲面を仕上げていく。

「思いどおりのきれいな曲面にするには、技はもちろん、感性も要ります。単純な私たちほど、いい味を出すのは難しいのです」

ろくろ引きを終えた銅器は、さらに何段階もの工程を経て、美しさが磨かれていく。

化学反応によって銅器の

肌に被膜をつくり、色を浮かびあがらせる着色。たがねなどの刃物で銅器の表面を削り、立体的な図柄を描く彫金。金銀などの金属をはめ込んで表面を細工する象嵌。それぞれどの工程で、専門の技術者が技を競いあつて銅器を仕上げる。

「人の技がこしらえる美しさですが、でき上がったものを見ると、それだけではないう力が働いているように感じます」

新しい才能も
铸込むまち

高岡銅器発祥の地である金屋町に、平成22年9月、工房とギャラリーを兼ねた新しい施設がオープンした。技能の継承を目指してつくり

洗練された曲線、青銅色の色合いが美しい高岡銅器の花器



銅器の
表現力を信じて、
伝統は歩みをとめない。

れた施設の名は「金屋町金属工芸工房かんか」。ここは、高岡銅器の若手作家たちの創作・発表の場であり、伝統的な技能の学びの場でもある。

「金屋町は高岡銅器の聖地。今も銅器の歴史が息づく地域のまん中に根をおろし、先達の技術や心を受け継いで

いきたい」と、同工房代表の槻間秀人さんは話す。

「かんか」に集う若手作家たちは、銅器づくりの現場で研鑽を積んできたベテラン技能者の指導を受けながら、創作に打ち込む。作品のカタチやスタイルはさまざまだが、表現の核には、鍍金、彫金といった高岡銅器の伝統技法がある。

歩みを止めることなく、新しい歴史を铸込み続けている。

伝統技法の彫金や象嵌を施すことで、銅器は美しい表情を持つ



「かんか」の建物は、映画「8月のクリスマス」のロケにも使われた古い理髪店

「優れた作品を目にする機会、優れた技を持つ人と触れ合う機会が、いつも身近にあります。その中から、高岡銅器の伝統を受け継ぐ新しい才能が育つていくことを期待しています」(槻間さん)



「かんか」のギャラリーに並ぶ金属工芸作品

【関連施設】



高岡銅器を中心に、富山県内の伝統工芸品の製作工程や歴史、名工・作家たちの逸品を紹介。高岡御車山(国の重要有形・無形民俗文化財)の3分の1複製も展示。高岡銅器の铸物体験(2週間前に要予約)もできる。

高岡地域地場産業センター

高岡市開発本町1-1
JR高岡駅より高岡市コミュニティバス約30分(地場産業センター下車)
0766-25-8283
9:00~18:00(11月~3月は9:30~17:00)
毎週火曜・年末年始

message

兼ね備えた二つの豊かさ

ひろた なおこ
廣田尚子 さん
ヒロタデザインスタジオ代表・女子美術大学芸術学部教授

人にとって心に響くこと、経済活動として発展していくこと、その二つを兼ね備えたデザインを、私は理想のデザインと考えています。高岡銅器の歴史と意匠には、まさにその理想が体现されています。そして現在も、伝統的な技法にさらに磨きをかけながら、多くの人々を満ち足りた気持ちにする優れた作品を生み続けていることに敬服しています。

